

インド後期密教における現世利益¹

松 村 幸 彦

0. はじめに

インドにおいて密教は3世紀頃から徐々にその姿を現し始め、13世紀前半頃にその姿を消すまで都合1000年程に亘って栄えた。そのインド密教を分類する方法²の一つとして初期（3世紀～7世紀）・中期（7世紀頃～8世紀頃）・後期（8世紀～13世紀前半頃）の3つに区分するものがある。初期密教では、陀羅尼などの一種の呪文を説く儀軌や経典が多く作られ、除災招福を目的とする儀礼が行われた。中期密教³では、マントラを唱え印を結び、観想によって尊格と合一することを目指す観想法が完成した。後期密教では、中期密教で説かれた儀礼などの実践面において性的な要素や不浄物の摂取という従来の仏教の枠組みを超えた内容、および脈管などを用いた疑似生理学的なヨーガが導入された。

これらの聖典はタントラとも呼称され、それに関係した儀軌などが多く作成された。この「タントラ」という概念は仏教においてのみ見られるものではなく、ヒンドゥー教やジャイナ教などにも見られ、中世のインドでは汎用されていた。

タントラの実践は、ヨーガ行者が最終的に目指す境地、現世において仏とな

1 本稿は第58回印度学宗教学会学術大会課題研究において発表した内容を加筆・修正し、纏めたものである。

2 他にインド密教を分類する方法として四つに分類する四分法、五つに分類する五分法がある。四分法では、所作タントラ・行タントラ・ヨーガタントラ・ヨーギニータントラに分類される。五分法では所作タントラ・行タントラ・ヨーガタントラ・ヨーゴッタラタントラ・ヨーガニルッタラタントラの五つに分類される。この中で後期密教に相当するのはヨーギニータントラ、ヨーゴッタラタントラ・ヨーガニルッタラタントラである。これらの分類については種村 [2010] でより詳しく説明されている。

また、プトンなどのチベットの学僧による四分法もあり、所作タントラ・行タントラ・ヨーガタントラ・無上ヨーガタントラの四つに分類され、無上ヨーガタントラが後期密教に相当する。プトンはさらに無上ヨーガタントラを方便・父タントラ、般若・母タントラ、双入不二タントラの三つに分類している。方便・父タントラには *Guhyasamājat ant ra* など、般若・母タントラには *Hevajrat ant ra* や *Cakrasamvarat ant ra* など、双入不二タントラには *Kālacakrat ant ra* が配されている。

3 中期密教を代表する聖典として『大日経』や『金剛頂経』などが挙げられる。

ること及び現世利益を志向して行われる。本稿では後期密教において見られる現世利益に着目し、護摩儀礼を中心に引き上げ、その内容を概観していきたい。

1. 後期密教における儀礼と現世利益

後期密教では現世利益に関係する儀礼として護摩 (homa-)、謂ゆる落慶式や尊像奉納儀礼であるプラティシュター (pratiṣṭhā-)、成就法 (sādhana-) が挙げられる。これらの各儀礼はマンダラを用いて行われることからマンダラ儀礼とも言われる⁴。まずはこれら三つの儀礼の概要を簡単に示したい。

護摩は炉を造り、その中に火を起し、火天という尊格を招く。その火天に対して閼伽水などの水を捧げ、花などを供える。その後で、炉の中の火に油、薪、穀物などの供物を投入する。それが終わると閼伽水などの水を再び捧げ、残りの供物を供えて、招いた火天にお帰り頂くことになる。大きな流れとして述べるなら以上のような仕方での願いの成就を図ることになる。

プラティシュターは、先述したように落慶式や尊像奉納儀礼などに相当し、仏像などの尊像、数珠や経典などの宗教的な物、僧院・仏塔などの宗教的な施設が建設された際に行われる儀礼であり、対象となる尊像や建築物などに尊格を留まらせるものである⁵。この儀礼は大枠として準備段階に相当するような儀礼 (広義のプラティシュター) と儀礼本体に相当するもの (狭義のプラティシュター) の二つの儀礼から構成される。その概要を森 [2011: 181-184] に従って説明するならば次のようである⁶。

まず、アディヴァーサナと呼ばれる儀礼が行われる。そこでは用意したマンダラにプラティシュターの対象となる尊像など及びそれを沐浴するための水瓶が設置される。その尊像に対してニールージャナと呼ばれる浄化の儀礼が行われ、それが終わった後でその尊像などの沐浴が行われる。沐浴を終えた尊像などを布で拭ってアディヴァーサナが終了する。その後、狭義のプラティシュター儀礼が行われる。そこではまず尊像などの中に智薩埵と呼ばれる尊格の本質的

4 他にマンダラを用いた儀礼として灌頂儀礼などが挙げられる。またマンダラの造壇を始めとしてそれを用いる儀礼が説かれるものはマンダラ儀軌とも呼ばれる。

5 プラティシュターについては種村 [2010]、森 [2011]、Bentor [1996]、Tanemura [2004] などで詳細な研究が行われている。

6 森 [2011: 181-184] では Abhayākaraḡupta 著 *Vajrāvali* に説かれる記述を基にその概要を説明している。

な姿をしたものを招請し、三摩耶薩埵と呼ばれる、ヨーガ行者が観想したものと合一させる。そして、水灌頂を初めとする都合9種類の灌頂が尊像に対して行われる⁷。灌頂が行われた後でその尊像に衣を供えて花などによる供養を行い、果物や財も供え、最後に鏡を尊像に示す。そして、金剛薩埵が尊像を加持すると思念し、プラティシュターの対象に招請した尊格がその中に長く留まるように請願して、金剛杵を回して対象を堅固にする。その後、マントラを唱えることやバリ、プラティシュター儀礼の施主から阿闍梨への布施などが行われて一連の儀礼が終わることになる⁸。

成就法は、ヨーガ行者が観想によって尊格と合一し、現世において仏となることを目指す実践である。尊格一尊のみを観想する場合もあれば、マンダラを観想することもある。この成就法の中に有情利益を行うように規定される箇所がある。その一例としてインド後期密教を代表する学僧の一人である Ratnākaraśānti の著した成就法 *Bhramahara-nāma-Hevajrasādhana*（以下 *Bhramahara*）の該当箇所を示したい。

それから、ガウリー、チャウリー、マンダラの主尊までのそれぞれを、順序正しく十方に連続して完全に発散してから、有情たちの利益を行って、まさにそれらに収斂して、なされるべきことをなしたマンダラとマンダラの主尊が戯論を離れた安楽とともにあることをみるべきである。その時、ガウリーは、身の真実を観察することに有情たちを完全に留まらせる。チャウリーは心の〔真実を観察すること〕、ヴェーターリーは語の〔真実を観察すること〕、ガスマリーは智の〔真実を観察すること〕に完全に留まらせる。ブッカシーは身の正しい智〔を観察すること〕において、シャバリーは心の〔正しい智を観察することにおいて〕、チャンダーリーは語の〔正しい智を観察することにおいて〕、ドーンビーは智の〔正しい智を観察す

7 弟子の入門儀礼が尊像に対してもそのまま当てはめられている。この灌頂とプラティシュターの関係について Tanemura [2004] においても詳細に研究されており、プラティシュターにおける灌頂は生起次第及び成就法の中で行われる観想対象の尊格への灌頂に相当するものであること、弟子への灌頂では阿闍梨灌頂に相当する機能を持ったものであることが指摘されている。

8 このプラティシュター儀礼は、公共的な性格を帯びた側面があることが種村 [2010: 258-262] で指摘されている。

ることにおいて完全に留まらせる〕。そしてマンダラの主尊は、大持金剛の状態に有情たちを留まらせる⁹。

上記は「最勝なる行為の王という名の三昧」の中に説かれるものである¹⁰。この直前に説かれる観想の中でヨーガ行者は女神が配されるマンダラ輪を観想している。ここではそこに説かれる八女神とマンダラの主尊を十方に行き渡らせると観想し、有情利益を行うように規定されている。ガウリーを始めとする八女神が順番に有情を利益し、最終的にマンダラの主尊が有情を大持金剛の状態、つまり最高位の尊格の状態に至らしめることを意味している。細部などに相異は見られるが他の成就法でも同様の内容は説かれることがあり¹¹、これも現世利益の一例である。

以上現世利益に関する儀礼を概観してきた。上記三つの儀礼の中でも特に護摩儀礼はその目的に応じた修法が行われる。それを纏めるならば以下の通りである。

- ・息災 (śāntika-) : 災いや不幸を取り除く
- ・増益 (pauṣṭika-) : 財や幸福の増進を目指す
- ・敬愛 (vaśya-/ vaśīkaraṇa-) : 自分の思い通りにしたい相手を操る / 和合・親睦を図る。

9 tato gaurīm caurīm yāvan maṇḍalādhīpatiṃ pratyekam anupūrvyā daśasu dikṣu nīrantarāṃ saṃsphārya, sattvānām arthaṃ kṛtvā, teṣv eva saṃhṛtya, kṛtakṛtyaṃ maṇḍalaṃ maṇḍalādhīpatiṃ ca niṣprapañcasukhasamarpitaṃ paśyet. tatra gaurī kāyasya bhūtapratyavekṣāyāṃ sattvān vyavasthāpayati, caurī cittasya, vettālī vācaḥ, ghasmarī jñānasya, pukkaṣī kāyasya samyagjñāne, śabarī cittasya, caṇḍālī vācaḥ, ḍombī jñānasya. maṇḍaleśvaras tu mahāvajradharapade sattvān avasthāpayati. (Isaacson [2002: 59])

10 *Bhramahara* には「最初のヨーガという名の三昧」・「最勝なるマンダラの王という名の三昧」・「最勝なる行為の王という名の三昧」という三つの三昧が説かれており、成就法の内容がその三昧によって区分されている。ただ、観想を始める準備段階に相当する箇所は「最初のヨーガという名の三昧」に含めてよいのかどうか疑問であるが本稿ではその詳細について触れないこととする。なお、この三つの三昧は *Bhramahara* のみに説かれるものではなく、他の成就法にも見られるものである。

11 例えば、Saroruhavajra 著 *Hevajrasādhanaopāyikā* や Ratnākaraśānti 著 *Hevajratāntra* への註釈書 *Muktāvalī* の中に説かれる成就法にも見られる。*Muktāvalī* では *Hevajratāntra* I . viii . 24への註釈の後にナイラートムヤーの成就法が説かれており、その中でマンダラの女神たちが雲を発散して有情利益を行うという記述がある (Tripathi & Negi [2001: 85])。

- ・調伏 (abhicāra-) : 怨敵などを退散させる。
- ・殺害 / 呪殺 (māraṇa-) ¹²
- ・追放 (uccāṭana-)
- ・鉤召 (ākaraṣaṇa-) : 自分の所へ人や物などを引き寄せる。
- ・遮止 (stambhana-) : 人などの動きを止める。
- ・離間 (vidveṣaṇa-) : 誰かと誰かを仲違いさせる。
- ・惑乱 (moha-) : 対象を錯乱させる。

以上の中で息災・増益・敬愛・調伏の四つは四種法と言われ、この四つが修法の基本として存在している。その他の修法については後期密教の時代になって見られるようになったものである。その中で、敬愛と鉤召は性格に近いものとされており、調伏から派生して殺害 / 呪殺・追放・離間の各修法が登場したと言われている¹³。さらに遮止や惑乱は *Samvarodayatantra* に詳細に説かれており¹⁴、後代のタントラにおいて発展していった可能性が頼富 [1978: 11] で指摘されている。これらの修法は主に護摩を用いることによってその成就を図り、それぞれの目的に応じて、その儀礼の内容を構成する要素に違いが見られることになる。その一例として次に Saroruhavajra が著した護摩儀軌を採り上げ、その内容を示したい。

2. インド後期密教における護摩の一例

インド後期密教における護摩儀礼¹⁵の一例として9世紀から10世紀前半頃に

-
- 12 調伏と殺害 / 呪殺がテキストによっては置き換えられていることが頼富 [1978: 11] で指摘されている。
- 13 頼富 [1978] では *Hevajratantra* に説かれる護摩の記述と同タントラの系統に属するいくつかの護摩儀軌を採り上げて各修法の関係を論じている。その中で敬愛と鉤召の親近性、調伏から殺害などが派生したことを指摘している。
- 14 Tsuda [1974: 113, 138] 参照のこと。
- 15 インドにおける護摩の先行研究としては以下のものが挙げられる。インド後期密教を代表する学僧の一人である Abhayākara Gupta が著した *Jyotirmañjarī* が挙げられる。*Jyotirmañjarī* は、マンダラ儀礼を扱う *Vajrāvalī* やマンダラ観想法を説く *Niṣpannayogāvalī* とともに Abhayākara Gupta による三部作の一つとされている。不完全ながらサンスクリット写本が一本現存しており、奥山直司教授による校訂テキストや日本語訳、内容の紹介など一連の研究がある（奥山 [1983a, 1983b, 1984, 1986, 1999]）。他に奥山教授の校訂テキストとチベット語訳に基づいた、英語によ

活動していたと考えられる学僧 Saroruhavajra が著した *Homavidhi を採り上げ、その概要を示したい¹⁶。*Homavidhi ではまず三つの区分が「無上と内的と外的であり、三種類の護摩の区分がある¹⁷」と説かれている。そしてそれぞれの内容に関して以下のように述べられる。

智の火天が、蘊などの燃料を燃やすことが無上である。外的な護摩を整理して、食べ物を食べることなどは内的なものの〔護摩〕として説明する¹⁸。

以上では、三つの護摩の区分について簡潔に説明がなされている。無上の護摩は智の火天が蘊などの燃料を燃やすこととされているが、同テキストにはそれ以上の説明がなされていない¹⁹。外的な護摩とは外的な所作、つまり実際に炉に火を起し、護摩を焚くことを意味している。内的な護摩とは、食べ物を食べることなどと言われているが、これも無上の護摩と同様に詳しい内容について触れていない。奥山 [1984: 105] によれば、食べ物の消化過程を護摩に見立てる内的な護摩があると指摘されており²⁰、この内的な護摩もそれと同様

る全訳がある (Skorupski [1994])。Vajrāvalī に説かれる護摩に関しては、森 [1993] の研究がある。また、頼富 [1978] では、Hevajratāntra に基づいた護摩儀軌 (Homavidhi) を五つ採り上げ、それらの中で説かれているそれぞれの修法 (息災や増益、敬愛、調伏など) の展開に関して考察を行い、四種の修法が根底にありそれが展開し修法の種類が増えたことを考察している。その他には、般若・母タントラに属する経典である Vajradākatantra に説かれる護摩儀礼に関して、校訂テキストとその翻訳が行われており (杉木 [2010], Sugiki [2008]), 桜井 [2006] では Mañjuśrīmitra が説く死者儀礼文献を考察する中で Mañjuśrīmitra が説く護摩儀軌の内容に関しても検討している。また桜井 [2010] では聖者流の説く荼毘護摩に関する研究が行われている。Sugiki [2016] は内的な護摩に関して Mahāmudrātilakatantra や Vajramālātāntra を始めとする複数のタントラや儀軌を用いて研究を行っている。Gray [2016] は Kāṇha/ Kṛṣṇa の Śricakrasaṃvarahomavidhi の内容を分析している。

16 同テキストはチベット語訳のみ現存している。

17 /bla med nañ dañ phyi rol te/ /sbyin sreg dbye ba nman pa gsum/ (『中大丹』Vol.5, p. 66, 116-7)

18 ye šes me lha phuñ po sog/ /bud šin bsreg pa bla med yin/ /phyi rol sbyin sreg gis bsgrest/ /kha zas bzah sog nañ gir bsad/ (『中大丹』Vol.5, p. 66, 118-10.)

19 奥山 [1999: 187] では、このような無上の護摩は『大日経』以来の内護摩説を受け継いだ理念の表明であろうと解釈している。

20 その奥山 [1984: 105] での説明によれば、食物を甘露とし、手を大勺として食べ、膾の炉の火で焼いて心臓に宿る本尊を供養すると言われている。

の内容を示しているのかもしれない。その一方で、Saroruhavajra 著 *Hevajratantra* 註 **Hevajratantrapañjikāpadminī-nāma* (以下 **Padminī*) には内的な護摩に関して次のように説明されている。

今、内的な〔護摩〕の説明をしよう。臍の蓮華の大きな炉に、そこにおけるチャンダーリーの般若の火を、行為²¹の風によって燃やすことより恐れることなく護摩をすべきである。蘊や界などすべてを構想する。実体の無い乳木を燃やす。絶え間ない大勺 (**pātrī*-) によって、完成した菩提心の連続体である大樂の味わいによって、そこで供物を献供すべきである。法〔無我〕と人無我という準備 / アディヴァーサナ (**adhivāsana*-) とプラティシュターを行うべきである。不二である空と悲愍の菩提心がそれ自体である。すべての目的を成就させる護摩と最高のプラティシュターを御説きになった²²。

以上は *Hevajratantra* II.i.8-9への註釈の中で説かれている。ここでは内的な護摩として臍の蓮華²³を炉として、そこにチャンダーリーの火を起こし、護摩をするように規定されている。その際に、実体のない乳木、つまり観想によって乳木を燃やすように説かれている。そして、絶え間ない大勺、つまり途切れることなく大勺で供物を献供することと、大樂の味わいによって供物を献供するように述べられる。この説明によれば、**Homavidhi* で言われる「食べ物を食べることなど」という内的な護摩とは別の解釈が示されていると理解できる。しかし **Padminī* はタントラの註釈書という性格上、タントラの内容に沿うように上記のような記述を行ったために、両テキストに相違が生じたのではない

21 この場合の行為とは精神集中を行うこと、もしくは性的なヨーガのことを指していると思われる。

22 /da ni nañ gi bśad bya ste/ /lte baḥi padmaḥi thab khuñ cher/ /de la gtum moḥi śes rab me/ /las kyi rluñ gis ḥbar ba las/ /dogs pa med pas sbyin sreg bya/ /phuñ po kham sogs kun rtog pa/ /lus pa med paḥi yam śiñ bsreg /gshom du med paḥi dgañ gzar gyis/ /rdsogs paḥi byañ chub sems kyi rgyun/ /bde ba chen poḥi ror sbyor bas/ /de la sreg blugs dbul bar bya/ /chos dañ gañ zag bdag med paḥi/ /sta gon rab tu gnas par bya/ /stoñ pa sñid rje dbyer med paḥi/ /byañ chub sems ni de ſiḍ yin/ /don kun sgrub byed sbyin sreg dañ/ /mchog tu rab tu gnas par gsuñs/ (『中大丹』 Vol. 1, p. 1179, 119-p. 1180, 16)

23 おそらく、臍に位置している輪 (cakra-) にある蓮華を指していると思われる。

かと思われる。また、奥山 [1984: 105] によれば Abhayākara Gupta は内的な護摩として二種類の内容を示している。それは先述したように食べ物や甘露として食べ、臍の炉で焼いて心臓に宿る本尊を満足させるものと脈管と四つの輪 (cakra-) を観想し、チャンダーリーの火を起こして供物、つまり精液を融化させるものとされている。このことを参考に考えれば、*Homavidhi と *Padmini での記述の違いは Saroruha の考える儀礼の内容が変化したわけでも、両テキストの著者が異なっているわけでもなく、Saroruhavajra はこの Abhayākara Gupta と同様に二種類の内的な護摩を意図していたのではないかと筆者は考える。

上記の *Homavidhi からの引用箇処に続いて次のように説かれている。

マンダラと尊格を留めること²⁴と成就法の時に護摩をすべきである。護摩の行為がない時、悉地は生じることはないだろう。すなわちすべての行為を成就するためである²⁵。

以上では、どの場面で護摩を行うかが規定されている。つまり、マンダラの造壇の時、プラティシュターの時、そして成就法を行う時に護摩が行われるとされており²⁶、その護摩を行わなければ悉地は生じないと言われていることから護摩と他の儀礼は不可分の関係にあると Saroruha は考えていたと思われる。

続いて、*Homavidhi では護摩を行う目的として、息災 (*śāntika-)・増益 (*pauṣṭika-)・敬愛 (*vaśya-/ *vaśīkaraṇa-)・調伏 (*abhicāra-) / 殺害 (gsad,

24 プラティシュターのことを指していると思われる。

25 /dkyil ḥkhor dañ ni lha gnas dañ/ /sgrub paḥi dus su sbyin sreg bya/ /sbyin sreg las rnams med pa la/ /dños grub ḥbyuñ bar mi ḥgyur te/ /las rnams thams cad bsgrub paḥi phyir/ (『中大丹』 Vol. 5, p. 66, 111–p. 67, 12.)

26 Saroruhavajra 著 *Hevajraṇḍalakarmakramavidhi ではマンダラを描く際に土地へ線を引いたりする過程の冒頭で「準備 / 受認 (*adhivāsana-) のその後で日中、増益の護摩をすべきである」(sa sta gon gyi phyi de ſiin par rgyas paḥi sbyin sreg byaḥo 『中大丹』 Vol. 5, p. 31, 18; p. 944, 17) と述べたり、般若智灌頂が説かれた後で「それから、マンダラの中央で息災の護摩をすべきであり、それは他で理解されるべきであるから、ここでは書き留めない」(de nas dkyil ḥkhor gyi lha la shi baḥi sbyin sreg bya ste/ de ni gshan las ṣes par bya bas ḥdir ma bkod do// 『中大丹』 Vol. 5, p. 48, 117–18; p. 961, 111–12.) と述べている。

*māraṇa-) ²⁷・追放 (bskrad, *uccāṭana-)・鉤召 (*ākaraṣaṇa-) をテキスト中に挙げており、同テキストではこの六つの修法を中心として外的な護摩が説かれることになる。そして外的な護摩を説明する場合、炉・供物の特徴・成就者・尊格・成就の手段という五つの枠組みで説明されている²⁸。炉の形や色、供物の特徴、燃料などに関しては次の表のようにまとめることが可能である²⁹。

	息災	増益	敬愛	調伏	追放	鉤召
炉の形	円形	四角形	弓形	三角	三角	三角
炉の色	白	黄色	赤	黒	黒	赤
材料	芥子	dadhi による食事	ウトバラ	棘	棘	ウトバラ
すべてに共通な材料	閼伽・洗足水・洒水・香・塗り薬・花・灯明・芥子・乳木・酥油・dadhi による食べ物・クシャ草・ドウールヴァー草の芽・小麦・穀粒・豆・細かく砕かれていない米・鞍 (rta sga) ³⁰ ? ・ピンロウの実・ジャーティの実・消化された事物・甘露・火・薪					
その他				成就対象の影像・黒芥子・塩・御血・人骨の粉・毒・五勇者 (dpah bo lña mams) ? ³¹		

27 頼富 [1978] では、*Hevajratantra* と *Kṛṣṇa* と *Saroruhavajra* の護摩儀軌に説かれる炉の形状を採り上げて、調伏 (*abhicāra-) と殺害 (gsad, *māraṇa-) がテキストによっては置き換えがあることを考察している。それを踏まえれば、ここでの調伏から殺害への変更は殺害が調伏の synonym として用いられていると推測される。

28 「それから、外的なものの説明をしよう。炉と事物の特徴と成就者と尊〔格〕たちと成就の手段との五つのあり方となるだろう」(de nas phyi yi bśad bya ste/ /thab dan rdsas kyi mtshan ñid dan/ sgrub pa po dan lha dag dan/ sgrub pañi thabs dan rnam lñar hgyur/『中大丹』Vol. 5, p. 67, ll7-8)

29 紙幅の制限よりロケーションのみを示すこととする(『中大丹』Vol. 5, p. 67, ll10-p. 68, ll14.)。項目中の炉の形・色、方角、時間、供物、乳木に関しては頼富 [1978] で紹介されている。

30 「鞍」と訳したが、謂ゆる「鞍」を指しているのか、もしくは別のものを指しているのか筆者にはよく分からない。

31 具体的に何を指しているのか筆者には不明である。

乳木	ウドウン バラなど の木の枝 の先から 作ったも の	ウドウン バラなど の木の枝 の先から 作ったも の		棘のある 木の根か ら作った もの	棘のある 木の根か ら作った もの	棘のある 木の根か ら作った もの
乳木の寸法	長さは 1hasta, 幅 は親指の 高さ	長さは 1hasta, 幅 は親指と 小指程の 大きさ	長さは 1hasta, 幅 は親指の 高さ	長さは 10aṅgula, 幅は微細, もしくは 粗大	長さは 10aṅgula, 幅は微細, もしくは 粗大	長さは 10aṅgula, 幅は微細, もしくは 粗大
乳木に塗 るもの	蜜・ミルク・白い 旃檀の水	凝乳・ ギー・黄 色い香(香 水?)	赤い旃檀 の水・芥 子油	血・毒・ 塩の香(香 水?)	血・毒・ 塩の香(香 水?)	血・毒・ 塩の香(香 水?)
燃料	ウドウン バラなど の木の甘 味とミルクを伴う もの	酸味を伴 うもの	赤い土・ 鉤のよう な棘	苦味と辛 味を伴う 棘のある もの	苦味と辛 味を伴う 棘のある もの	赤い土・ 鉤のよう な棘
時間	夕方	早朝	宵の口	深夜・正 午	深夜・正 午	宵の口
方角	東	南	西	北	北	西
火種	乳木より 生じたも の・常に 置かれる 火・バラ モンの火・ 劣った火	王と王族 と宰相の 火・原野 より生じ た火	遊女もし くはヴァ イシュヤ が起こし た火	石とチャ ンダーラ の家から 生じた火	石とチャ ンダーラ の家から 生じた火	踊り手と 音楽/楽 器より生 じた火・ 道の上で の召使の 火

上記で明らかのようにそれぞれの目的に応じて炉の形状や投じる供物, 方角, 使用する火の種類などに相違が見られる。ただ調伏と追放の二つはその他の供物以外の項目が一致しており, その性格に親近性があると考えられる³²。また,

32 頼富 [1978: 11] では *Hevajratāntra* への註釈書や五つの護摩儀軌, *Hevajratāntra*, *Samvarodayatantra* などを用いて調伏から追放や殺害, 離間が派生したと指摘されている。

敬愛と鉤召は炉の形状と使用する火の種類に違いが見られるがそれ以外の要素は同じであり、この両者も同様に性格に親近性が見られると思われる³³。炉の大きさ³⁴や炉を取り囲むヴェーディー（祭壇）もその目的に応じて違いが見られる。それを纏めるならば、以下の表の通りである³⁵。

	息災	増益	敬愛	調伏	追放	鉤召
炉の標幟 ³⁶	金剛杵・カルトリ	宝石	蓮華	剣	三鈷杵	鉤
炉の広さ (幅)	1hasta	2hasta	1hasta	20aṅgula	20aṅgula	20aṅgula
炉の深さ	1vitasti	1hasta	1vitasti	10aṅgula	10aṅgula	10aṅgula
ヴェーディーの 標幟	金剛杵	宝石	蓮華	剣	三鈷杵	鉤

上記に付け加えるならば、ヴェーディーの大きさと炉からの距離に関して息災では炉の端から4aṅgula離れたところに4aṅgulaの大きさ、増益では8aṅgula離れたところに8aṅgulaの大きさ、敬愛は息災と同様である。調伏は3aṅgula離れたところに3aṅgulaの大きさであり、鉤召と追放もこれと同様に説かれている³⁷。

一方、*Hevajratantra* II.i.6-8ab では、炉の形状などに関して次のように説かれている。

息災において炉は円形である。一方、増益において四角である。

殺害において三角形であると宣言された。残りをまさにそれに関して完成させるべきである。//6//

一方で息災は高さと深さに関して1hasta と半 hasta となるべきである。

33 頼富 [1978: 7] では註32と同様に敬愛と鉤召が密接な関連を持っており、敬愛から鉤召が別出されたのではないかと指摘している。

34 hasta は肘から中指の先までの長さ（約50cm）、vitasti は親指と小指を張った間の長さ、もしくは手首から指先までの距離（12aṅgula）、aṅgula は指の幅を表す（1aṅgula は1hasta の24分の1）。

35 『中大丹』 Vol. 5, p. 68, 113-12.

36 炉穴の中の四方にはカトヴァーンガ杖と善逝の外的な標識を配置するように説かれている。（『中大丹』 Vol. 5, p. 68, 119-11.）

37 『中大丹』 Vol. 5, p. 67, 119-p. 68, 13.

増益は高さと深さに関して2hasta と1hasta が考えられる。//7//

殺害は高さと深さに関して20aṅgula と半分 (10aṅgula-) となるべきである。³⁸

以上で見られるように同タントラには息災と増益と殺害という三つが説かれておりその他の目的に関しては明記されていない。しかし、**Padmini* では6偈 cd 句の「残り」に関して敬愛と鉤召と争うことと追放といった名前を挙げている³⁹。息災の護摩に関しては広さが1hasta で深さが1vitasti の円形で炉の底に羯磨金剛を描くように言われ、ヴェーディーについては4aṅgula 離して4aṅgula の大きさと説かれる。増益の護摩についてはタントラにあるように広さ2hasta と深さ1hasta で、ヴェーディーは8aṅgula 離れたところに8aṅgula の大きさで作るように説かれる。炉の底に何を描くかは説かれぬ。タントラでは殺害 (māraṇa-) となっているが **Padmini* では殺害の護摩だけでなく調伏の護摩としても説明されており、彼の理解では両者は同質のものとされていたと推測される。炉の大きさとしてはタントラの文言通り20aṅgula と10aṅgula とされ、ヴェーディーは3aṅgula の大きさとして説かれているが炉の底に描く標幟については説かれぬ。敬愛や鉤召については炉の大きさやヴェーディーに関する註釈はなされていない⁴⁰。上記の **Padmini* で註釈される内容と **Homavidhi* で説かれる内容はほぼ一致しており、さらに息災・増益・殺害 / 調伏に関してはタントラの内容を承けて構成されていると思われる。

閑伽水などを入れる器は、銀・黄金・銅・鉄などによって作るように規定される。大勺と小勺の取手は1hasta の長さで下部に金剛宝が付けられる。大勺の幅は4aṅgula、深さが2aṅgula であり、上部には金剛杵が付いている。4aṅgula の幅をした大勺の端に金剛杵、間に蓮華の葉の形状をしたものが付いている。

38 śāntike vartulaṃ kuṇḍaṃ caturastaṃ tu pauṣṭike/ trikoṇaṃ māraṇe proktaṃ śeṣān atraiva sādhaṇe//6// ekahastārdhahastaṃ vā dhordhve tu śāntikaṃ bhavet/ dvihastaṃ ekahastaṃ ca adhordhve pauṣṭikaṃ matam//7// viṃśatyāṅgulaṃ ardhaṃ ca adhordhve māraṇaṃ bhavet/ (Fallow&Menon [1992: 149] , Snellgrove [1959: 42] , Tripathi&Negi [2001: 133] ; [2006: 105])

39 「残りをまさにそれによって完成させるべきである、というのは、敬愛と鉤召と争うことと追放などである」(lhag ma de ŋid kyis bsgrub bya shes pa dbaṅ daṅ/ dgug pa daṅ/hthab pa daṅ/bskrad pa la sogs paḥo/『中大丹』 Vol. 1, p. 1177, 1119-20.)

40 紙幅の都合により原文、試訳は示さず、ロケーションのみを示すこととする。『中大丹』 Vol. 1, p. 1177, 1119-p. 1179, 119.

小勺は蓮華の形状で幅が2aṅgula で深さが1aṅgula で内側に金剛杵があるとされる⁴¹。

資具の配置については、すべての資具は自分の右に配置するように言われる。また、金剛杵と金剛鈴と闍伽器は左に置くように説かれている。大勺と小勺とギーは前に置き、調伏に関しては逆であるとされている。そして香から置くように規定されている⁴²。

護摩儀礼を執行する成就者に関しては、すべての特徴を備えた者と言われているがそれ以上の説明はされない。*Jyotirmañjarī* や *Vajradākatantra* における護摩儀礼では、成就者が身に着ける衣や坐、坐法、心理状態などに関する記述がある⁴³。また **Padminī* にもそれぞれの目的に応じて行者が身に着ける衣の色などに関する記述が見られるため、それらを考慮すると **Homavidhi* でも同様に成就者の外見や内面の状態を示しているのかもしれない。

尊格としては次のように三種類挙げられている

ここでは尊格は三種であり、燃やされるべきものを受け取るものと行為をなすものと供養すべき火天であって、これらを他の特徴からお説きになった⁴⁴。

上記では燃やされるべきもの（供物）を受け取る火天と息災など目的の成就を図る火天と供養対象としての火天という三種類が説かれていると思われるが、ここではそれ以上の説明はなされていない。また **Padminī* にも同様の記述はなされていない。桜井 [2013 : 34] では、世間に住する火天、行者の生起した

41 『中大丹』 Vol. 5, p. 70, 112-7.

42 護摩のすべての資具は自分の右に配置すべきである。金剛杵と同じく鈴と闍伽の器は左に置くべきである。大勺と小勺と御バターは前に置くべきである。調伏 (abhicāra-) においては、逆である。すべてはまた香から置くべきである」 (/sbyin sreg yo byad thams cad ni/ bdag gi gyas su dgod par bya/ /rdo rje de bshin dril bu dañ/ / mchod yon snod ni gyon du gshag /dgañ gzar dañ ni blugs gzar dañ/ /mar ni mdun du gshag par bya/ /mñon spyod la ni go bzlog paḥo/ /thams cad kyañ ni bsañ nas gshag/ 『中大丹』 Vol. 5, p. 70, 1114-18.)

43 奥山 [1999: 183], 杉木 [2010: 67-68], Skorupski [1994: 226-224] を参照のこと。

44 ḥdir ni lha ni nram gsum ste/ /bsgreg bya len dañ las byed dañ/ /mchod par bya baḥi me lha ste/ /ḥdi nrams mtshan ṇid gshan nas gsuñs// (『中大丹』 Vol. 5, p. 71, 111-2.)

三昧耶尊としての火天、行者が招請した智尊としての火天の一体化が示されている。プトンの説くそれに鑑みれば、ここで Saroruha が説くのも「世間の火天」と「三摩耶尊としての火天」と「智尊としての火天」として理解することも可能かもしれない。また、プトンが説くその記述との影響関係もあるかもしれない。

続いて五つの枠組みの内、最後の成就の手段について紙幅の制限があるため細かい部分を省いてその概要を示したい⁴⁵。まず、阿闍梨は護摩を行う家屋によく坐して沐浴などを行ってから成就法において言われる仕方によって護摩の目的に一致する尊格が自分自身であるという意識を起こして、供物などを加持するように規定される。

それから、洒水 (bsaṅ gtor; *prokṣaṇa-) を行う。この場合、まずは洒水器に対して om rakṣa rakṣa hūṃ hūṃ hūṃ phaṭ というマントラを唱えてから行うことになる。そして、闍伽水などに対してすべてが清浄であると思念して洒水する。闍伽水だけでなく炉に対しても洒水を行い、その後で種火を受け取って炉に入れ、扇子によって火を上げる。それからクシャ草を清めてマントラを唱えて東・南・西・北・中央にそれを広げる。

その場所に hūṃ より生じた炉口を思念する。炉口の形は息災など行う修法に対応するものを思念するように規定される。それから炉口の中央に八葉の蓮華を観想し、五相現等覚によって金剛薩埵を生起させ、金剛薩埵が変じた ram より火天を思念する。ここで観想される火天の姿は、三面六臂で明妃を抱擁している。右の二臂は杖と施無畏印、左の二臂には数珠と水差しを保持している。火天の肌の色は護摩の目的ごとに違っており、息災は白、増益は黄色、敬愛と鉤召は赤、殺害と追放は黒である。また敬愛と鉤召では右臂と左臂の間に鉤と索を保持し、殺害・追放の場合は右臂に剣をさらに保持していると規定されている。ここまでに説かれる火天は三摩耶の火天として理解される⁴⁶。

そしてマントラと印によって智の火天を招くように説かれている。智の火天

45 『中大丹』 Vol. 5, p. 71, 13–p. 75, 119

46 三摩耶の火天という文言はここには見られないが、この次に「智の火天」という文言が見られることと観想の内容、そしてこの成就の手段という枠組みの最後の撥遣の後で「それから、三摩耶火天は火の姿となったと構想する (de nas dam tshig me lha ni/ me yi gzugs su gyur par brtag 『中大丹』 Vol. 5, p. 75, 118–19)」と説かれるため、そのように理解した。

とは上述のように観想した火天と同じような姿をしているが、火天そのものの本質的な姿をしたものであり、行者の元へ招請される火天である。ここで用いられるマントラは *Hevajratantra* II.i.11 に説かれるマントラ⁴⁷であり、印は右で施無畏印をなし、小指と薬指と中指を曲げる。その後、障碍を駆逐し洒水を行い、jah hūṃ vaṃ hoḥ を唱えて、鉤召・引入・束縛・喜ばせることを火天に対して行う⁴⁸。次に、火天をその胸にある種子の光線によって如来たちを促して、灌頂する。息災では毘盧遮那、増益では宝生、敬愛・鉤召では無量寿、殺害などでは阿闍が灌頂によって宝冠に生じる。それから洒水などを奉献し、火天の口、そして大勺・小勺にそれぞれ raṃ 字を布置して、ギーで満たされた大勺と小勺を七回、または三回、もしくは一回火天のマントラを唱えながら奉献するよう説かれる。それから火相を見て、悪い場合は守護をするように説かれるがその詳細は述べられない。奉献する材料にはそれぞれ決まったマントラがあり、それを唱えながら火天に捧げる。もし決まったマントラの無い供物の場合は、火天のマントラで代用される。そして、火天の身体各処等に供物を奉献し、洒水を奉献して讃え、火天による灌頂がなされる。ここで乳木は光の輪に、胡麻と乳粥と凝乳は手に、クシャ草とドゥールヴァー草は頭の宝冠に、大麦と小麦と米とマーシャ豆 (mon sran, *māṣa-) と小石が顔に、息災の供物は顔に、香は胸に、花は頭に、漱口水は顔に、閼伽は手に、灯明は眼の前に奉献するように規定されている。

その後、火天の胸にある日輪を思念し、尊格たちを生起させる。火天の胸にある種子からの光線によって智マンダラを招請し、障碍を追い払い、香と閼伽を与え、jah hūṃ vaṃ hoḥ を唱えて、ガウリーなど四人の女神によって鉤召・引入・束縛・喜ばせることを行う。招請した智マンダラによって、灌頂し、漱口水と閼伽を奉献するように説かれている。尊格たちを hūṃ として舌に布置して供養し、最後に満勺供によって奉献する。この場合、唱えるマントラの終わりに、息災などの修法に応じたマントラが付加される。それから洒水の奉献と讃嘆を行い、甘露の享受がなされる。そして、バリを奉献し、残った供物は

47 om agnaye mahātejah sarvakāmaprasādhaka/ kārūṇyakṛtasatvārtha asmin sannihito bhava/ agnyāvāhanamantrah//11// (Fallow&Menon [1992: 150] , Snellgrove [1959: 44] , Tripathi&Negi [2001: 134] ; [2006: 105])

48 この過程は Hevajra 系に関係なく多くの成就法が採用するものである。

火天に対して、マントラによって浄め、洒水と閼伽などを奉獻する。最後に讃嘆と甘露の享受を行い、撥遣をして火天にお帰り頂くことになる。

3. おわりに

以上インド後期密教における現世利益に関する儀礼を概観し、その一例として Saroruhavajra が説く護摩儀軌を採り上げ、その内容を概観してきた。今後の課題の一つとして護摩儀礼とヴェーダ儀礼及びヒンドゥータントラなどにおける儀礼などとの影響関係の考察が挙げられる。また、インド後期密教の中で Saroruhavajra の説く護摩儀礼が後代にどのように受容され、展開されていったのかに関しても考察する必要があると思われる。

参考文献

■一次資料

- ・ *Bhramahara-nāma-Hevajrasādhana*: Isaacson [2002]
- ・ *Muktāvalī*: Tripathi & Negi [2001]
- ・ *Hevajratantra*: Fallow&Menon [1992], Snellgrove [1959], Tripathi&Negi [2001]; [2006]
- ・ **Hevajratantrapañjikāpadminī-nāma*
Tib: Toh.1181, Ota. 2311, 『中大丹』 Vol. 1, pp. 1105-1226.
- ・ **Homavidhi*
Tib: Toh. 1223, Ota. 2352, 『中大丹』 Vol.5, pp. 66-76.

■二次資料

奥山直司

- 「Abhayākara Gupta の護摩儀軌 Jyotirmañjarī」, 『印度学仏教学研究』 31 (2), pp. 132-133, 1983a
- 「Jyotirmañjarī の研究 (Ⅰ)」, 『文化』 47 (1-2), pp. 29-46, 1983b
- 「Abhayākara Gupta の護摩修法」, 『印度学仏教学研究』 32 (2), pp. 104-106, 1984
- 「Jyotirmañjarī の研究 (Ⅱ)」, 『論集』 13, pp. 1-18, 1986
- 「インド密教ホーマ儀礼」, 『インド密教』 シリーズ密教 1, 春秋社, 1999

桜井宗信

「Mañjuśrīmitra の説く死者儀礼」, 『密教学研究』 38号, pp. 1-14, 2006.

「聖者流の伝える茶毘儀礼—hPhags pa lha (*Āryadeva) に帰された著作を中心に—」, 『現代密教』 第21号, pp. 67-79, 2010

「Bu ston の示す死者儀礼 (2) —Mi 'khrugs pa'i cho ga la brten nas ro'i sbyin sreg gi cho ga を中心に—」, 『日本西蔵学会々報』 第59号, pp. 27-43, 2013

杉木恒彦

「『ヴァジュラダーカ・タントラ』護摩の章 (第44章, 48章) —試訳」, 『在家仏教こころの研究所紀要』 第5号, pp. 59-72, 2010

種村隆元

「密教の出現と展開」, 『新アジア仏教史02インドⅡ 仏教の形成と展開』, pp. 210-262, 東京, 佼成出版社, 2010.

森雅秀

「護摩修法と火炉に関する一考察」, 『名古屋大学文学部研究論集』 117号, pp. 35-52, 1993

『インド密教の儀礼世界』, 世界思想社, 2011.

Bentor, Yael

Consecration of Images & Stūpas in Indo-Tibetan Tantric Buddhism. Leiden • New York • Köln: E. J. Brill (Brill's Indological Library 11) . 1996.

Fallow, G.W.&Menon, I.

The concealed Essence of the Hevajra Tantra. Delhi: Motilal Banarsidass. 1992.

Gray, David B.

The Three Types of Fire Sacrifice According to Kāṇha's Śrīcakrasaṃvara-homavidhi. *Homa Variations: The Study of Ritual Change across the Longue Durée*. New York: Oxford University Press. pp. 214-224. 2016.

Isaacson, Harunaga

Ratnākaraśānti's *Bhramaharanāma Hevajrasādhana*: Critical Edition (Studies in Ratnākaraśānti's Tantric Works Ⅲ) , 『国際仏教学大学院大学紀要』 5, pp.151-176. 2002.

Skorupski, Tadeusz

Jyotirmañjarī: Abhayākara Gupta's Commentary on Homa Rites. *Bulletin of the Research Institute of Esoteric Buddhist Culture Mikkyo Bunka Kenkyūsho Kiyo* 8, pp. 236–206, 1994

Snellgrove, D. L.

The Hevajrat Tantra A Critical Study Part II. London Oriental Series Volume 6. London: Oxford University Press. 1959.

Sugiki, Tsunehiko

The Homa System of the Vajradākatantra: A Critical Edition and a Preliminary Analysis of its Homa System. Tantric Studies Vol.1 Center for Tantric Studies, University of Hamburg, pp. 131–154, 2008.

Oblation, Non-conception, and Body: Systems of Psychosomatic Fire Oblation in Esoteric Buddhism in Medieval South Asia. *Homa Variations: The Study of Ritual Change across the Longue Durée*. New York: Oxford University Press. pp. 167–213. 2016.

Tanemura, Ryugen

Kuladatta's Kriyāsaṃgrahapañjikā. A critical edition and annotated translation of selected sections. Groningen Oriental Studies Volume X I X. Groningen: Egbert Forsten. 2004.

Tripathi, Ram Shankar & Negi, Thakur Sain

Hevajratāntram with Muktāvalīpañjikā of Mahāpaṇḍitācārya Ratnākaraśānti. Bibliotheca Indo-Tibetica Series 48. Sarnath, Varanasi: Central Institute of Higher Tibetan Studies. 2001.

Hevajratāntram with Yogaratnamālāpañjikā of Mahāpaṇḍitācārya Kṛṣṇapāda. Bibliotheca Indo-Tibetica Series 65. Sarnath, Varanasi: Central Institute of Higher Tibetan Studies. 2006.

Tsuda, Shinichi

The Saṃvarodayatantra Selected Chapters. Tokyo: The Hokuseido Press. 1974.

【付記】：本研究は平成28年度種智院大学同窓会研究助成金による成果の一部である。

On Worldly Benefits in Late Indian Esoteric Buddhism

Yukihiko MATSUMURA

In India, esoteric Buddhism flourished for about one thousand years. One of the means by which to classify Indian esoteric Buddhism is via three periodic groups. These three groups are the early period (3rd -7th centuries CE), the middle period (7th -8th centuries CE), and late period (8th -13th centuries CE). The purpose of this paper is to take a general view of rituals for worldly benefits in late Indian esoteric Buddhism. A particular example examined here is the fire ritual text written by Saroruhavajra.

We may put forward the fire ritual (*homa*-), rituals of installation (*pratiṣṭhā*-), and the process of meditative realization (*sādhana*-) as the main rituals for worldly benefits in late Indian esoteric Buddhism. The fire ritual (*homa*-) involves burning small pieces of wood and other offerings on the altar to invoke divine assistance. The rituals of installation (*pratiṣṭhā*-) for the purpose of having a specific deity reside in a particular object or location, such as a statue, an image or a temple. The process of meditative realization (*sādhana*-) is the visualization by which the practitioner achieves the highest stage as a yogi. It also, however, has an aspect of achieving worldly benefits. This involves the practitioner sending forth deities to other beings by means of visualizations, bringing some benefit to that other being or beings, then bringing the deities back to the location of the ritual.

There are various types of rituals for worldly benefits: the peaceful rite (*śāntika*-), the enriching rite (*pauṣṭika*-), the subduing rite (*vaśya/vaśīkaraṇa*-), the dispersing an enemy rite (*abhicāra*-), the slaying rite (*māraṇa*-), the expelling rite (*uccātana*-), the inviting rite (*ākaraṇa*-), the paralyzing rite (*stambhana*-), the causing hatred rite (*vidveṣaṇa*-), the confusing rite (*moha*-) and so on. These are all chiefly practiced via the fire ritual, though they vary in aspects such as the shape of hearth used, the kinds of offerings made and the kindling charcoal used.

I provide an overview of the contents of the fire ritual text written by Saroruhavajra. He explains the fire ritual via three classifications; the exterior, the interior and the highest. He did not explain the interior and the highest *homa*- rituals in detail. The exterior fire ritual is explained in terms of a fivefold framework consisting of the hearth, the nature of the offerings, the practitioner, the deity, and the means of accomplishing the ritual. He then explains the visualization of the fire deity (*agni*-) within the aspect of the means of accomplishing the ritual. Through this visualization and presenting of offerings, the votive request may be successful.